

やまぼうし



創刊 第2号
2019年 4月



陶磁研究やまぼうし会
YAMABOUSHI CERAMICS RESEARCH SOCIETY

ともに陶芸を楽しみませんか

スマートフォンが存在をいっそう増す今、人生において自分らしい時間を持つことが欠かせないものとなっています。そのために、陶芸は創る喜び、分かち合う喜びを実感できる格好の営みと言えます。

当会は「社会貢献を目指しながらコミュニティ・ライフを楽しむ」ことを理想としています。約20年前に、東京芸大公開講座（陶芸）の受講生が中心となって発足しました。2年前に陶磁研究「やまぼうし会」となってからも、公開講座の受講経験者が中核となって活動を支えています。つまり、陶芸の楽しさに目覚めた人々が、ともに高め合い支え合い、あるいは陶芸の楽しさの輪を広げていくことが活動の基本です。生きがいに満ちた自己実現の場となることでしょう。

2018年度は、恒例の会員による作品展をはじめ、技法講習会では芸大陶芸研究室関係者を講師に迎えるとともに、会員がコーディネーターを務める回も実現しました。また、文京区立湯島小学校での図工授業のお手伝いや、同校PTA主催の「親子陶芸教室」を共催しました。60名以上の会員の方々が前述のいずれかの企画に参加しています。この冊子をご覧いただければ、会員の生き生きとした活動の様子が伝わってくるはずです。

2019年度もさらに充実した企画を実施して参りますので、どうかご期待ください。そして、本誌により当会に興味を持っていただき、新たなお仲間と土に親しむ時間をともに過ごすことができましたら、このうえない喜びです。 陶磁研究やまぼうし会 会長 落合 卓四郎



豊福 誠 先生作品



三上 亮 先生作品



前田正博 先生作品



杉浦康益 先生作品

日本の工芸作家を中心に若手俊英作家からベテラン人気作家まで、工芸の世界の第一線で活躍する作家の個展、グループ展を中心に展開しております。また催事期間以外の常設展示では、東京藝術大学を卒業された旬な作家を中心に揃え展示をしております。作家物の作品を観て触れて「たなごころ」を存分にお楽しみ下さい。

ギャラリー山咲木・山崎哲也

〒103-0013 東京都中央区
日本橋人形町 2-16-2 ユウビル 1階
TEL 03-6661-6865 <http://www.g-yamasaki.jp>
FAX 03-6661-6896

<展示会会期中の営業時間>11:00～19:00

*会期中は無休 会期前後日休み

<展示会以外の営業時間>11:00～18:00

*展示会以外は、日・月曜日休み（臨時休業あり）



山咲木
ギャラリー

講演会の感想

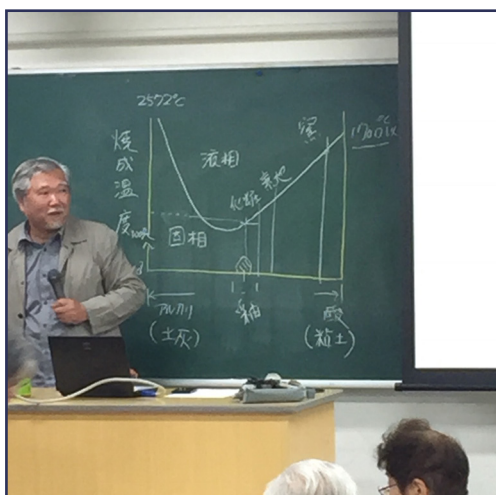


今年度の講演は法政大学講師 水上和則 先生です。

テーマは「陶芸用釉・基礎のはなし」として丁寧な説明を頂きました。

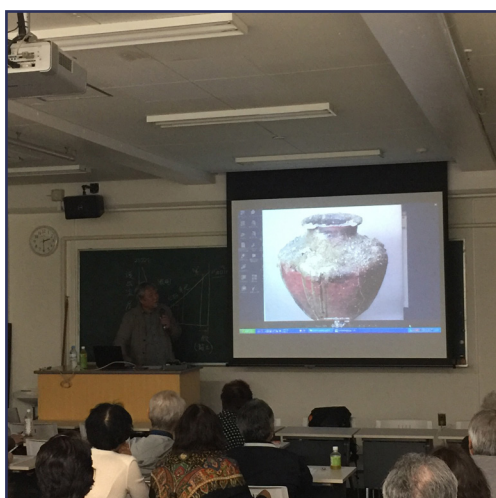
私は、陶芸を始めたころより釉薬に興味を持ち、釉薬についてのやさしい本を読んだだけの簡単な知識でした。今回の講演会で水上先生の話しを聞き改めて興味を深めた所です。

私たちの作陶で使用している陶土について、地層の成り立ちを通して陶芸で使えるような土が自然界で生成され、人の手により不純物を除き水簸までの行程や釉薬の興味深い話を聞かせていただきました。また釉薬について、市販されている釉薬は、”焼成条件”や”雰囲気”の違いが多少あっても安定した焼成ができる。しかし器の表面を覆う釉薬から意外性のある、三角座標で少し不安定領域に位置した釉薬の変化の面白さなど話して頂き、深く興味を感じたところです。



常々釉薬に対して、市販の釉薬に手を加えたものを作品に使いたいと考えています。また基礎釉薬を作り外割で酸化金属や土石を加えたりして幅広く挑戦したいと改めて感じています。

昨秋には、武蔵野台地の農家の屋敷林である櫟の葉を集めて燃やし水簸まで約5月掛けてやっと櫟灰として手に入れたところです。以前作った櫟灰では、自称黄瀬戸釉や黒釉を作り黄瀬戸釉では展示会にも出品しました。



先生の講演を拝聴し改めて釉薬の面白さに気づき、先生の話書を参考に土石や釉薬の知識を広げ作陶を楽しみたいと考えています。

ありがとうございました。

山中峰雄 記

第1回 技法講習会

2018・4・14 アカデミー湯島学習室

「本漆での陶磁器絵の加飾」

講師：菱田賢治 先生



菱田 賢治 先生

本漆を焼き締め半径10cmの盃（藝大陶芸研究室作成）の内側に、黒土と半磁土それぞれ3個ずつに加飾する内容でした。

半磁土の白は弁柄漆を塗り待つこと10分、半乾きの上に代用金（アルミの粉）をたっぷりのせ、真綿でさっと払うと華やかな金色の仕上がり！

黒土には「生漆を刷毛でまんべんなく塗りあとで臺乾燥」を5回くらい繰り返して完成。

こっくり、ぼってりとした表情は陶胎漆器と言うよりも木胎漆器のよう！

黒土半磁土の器への漆塗り5回の残り4回と6個の器の外側への加飾は家での作業のお楽しみとなりました。

貫入の入った器への漆塗りの結果は、くっきりと弁柄や黒色が入った物と、あまり入らなかったものがあり、器によっての差のようです。

既成の作品への加飾による新たな表現の広がりを楽しめました。



先生の作品見本



アルコールで拭く



弁柄で下塗り



代用金をのせる



仕上げの金泥雲母



金の仕上がり



仕上がり作品

第2回 技法講習会

「化粧技法を学ぶ」

2018・7・14・15・16 アカデミー湯島学習室

講師：西村 圭生 先生

7月14日作陶

7月15日西村先生指導

7月16日西村先生指導



西村 圭生 先生

赤土 4K で作陶し全体又は部分的に白化粧を塗る事を学びました。

白化粧をするときベタつかず乾き過ぎずの頃合いをみて塗る。又調合も失敗の少ないレシピを教えて頂き大変勉強になりました。又焼きあがってブツブツする時はヤスリで整えたり作品を使用する前に米粉を溶いた水を沸騰させ器を煮て冷めるまで放置し、そのあと取り出して拭かずに天日干しにする。それを3回位繰り返すと貫入に汚れが入りにくい等、色々コツを教わりました。色化粧、刷毛目、スリップウェア、掻き落とし等皆さん力作でした。



作陶のレクチャー



西村先生の講座に参加された方で蕎麦打ちをされる方がいらして、蕎麦猪口を作ろうと言う話になりました。勿論そういう話には皆大賛成！自分の作った蕎麦猪口で打ちたての蕎麦が食べられるなんて、何て幸せな事でしょう。其々お好みの形の蕎麦猪口を作りアカデミー湯島の窯で焼き上げ打ちたての蕎麦に皆舌鼓を打ちました。

長濱善子 記



西村先生作品見本



素焼きが終了した作品



二種類の化粧土



ああ美味手打ち蕎麦



手作り蕎麦猪口



西村先生の作品

第3回 技法講習会

2018・9・8 アカデミー湯島学習室

「洋絵具を使って描く上絵」

講師： 6名の会員

講師： 宇詠多ひかり・荻原和子・落合博子・小島龍子・鳴島淳子・茂貫浩子・(敬称略)

これは、大倉陶園の高級洋食器に見られるような美しい花々や果物、動物、紋様などを釉薬の掛かった陶磁器に描く上絵付けです。その方法や手順、描き方のコツなどを教えていただきました。6名のベテランの先生方に、代わる代わるアドバイスをいただきながら2枚のお皿が出来上がりました。そしてその4日後には、焼成された作品が手許に届きました。感謝感激です。洋絵具の上絵は、和の九谷焼の玉ぐすりと違って、油絵具や水彩絵具のように、自由に色を混ぜ合わせたり、ぼかしも出来るので素敵です。また描いた感じが焼成後も、ほとんど変わらないので安心です。難しいのは絵具を生地に載せていく描き方で、筆圧を掛けなくて軽く触るようにうすく、うすく・・・、早くコツを覚えてしまいたいものです。今までの手許にある作品をリメイクするのも役立ちそうです。

地震や洪水などの災害の多いこの頃ですが、そうした身の回りの心配事など、すっかり忘れてしまったようなたのしいひとときでした。参加された皆様の作品に触れて、感動し新しい意欲が湧いてきたことも大きな収穫でした。

多比羅 春代 記



第4回 技法講習会

2018・9・14 なかのZERO 美術工芸室

「練り込み技法による器」

講師：梅澤 幸子 先生

アドバイザー：益田 滋子 会員

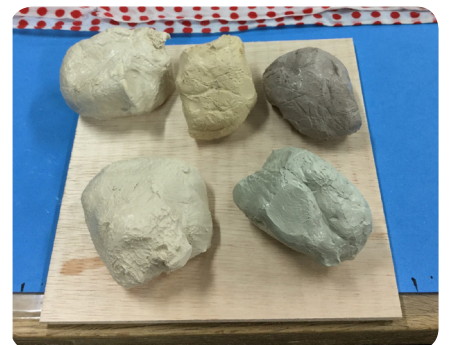
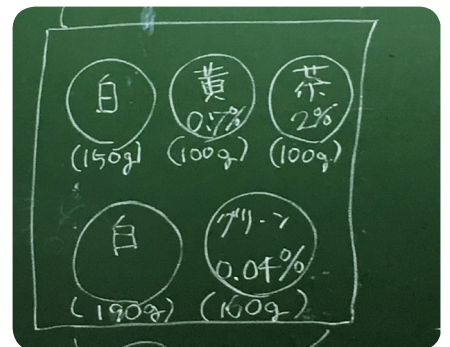


磁土の練り込みは、初めてだったので、どのような皿ができるかワクワクしながら取り組みました。葉や花のパーツ作りでは、色の違う粘土を圧着し伸ばして、さらにカットしたり重ねていくうちに、切り口が複雑になっていき、「おもしろい」と思いました。

次に葉と花のパーツをプラスチックの型に配置し、キリフキで水をかけ、両手で圧縮していきます。タタラ板を使いスライスし、石膏型に載せ、カッターで余分な縁を切り、口をしめ、型からはずします。最後のころは時間が無くなり慌ててしまいましたが、きれいな模様の皿ができ、ほっとしました。

今回の講習会では、梅澤先生・アドバイザーの益田さんが、練り込みをわかりやすく学べるように、事前の入念な準備、当日の丁寧な指導で、充実した楽しい時間を過ごすことができました。貴重な体験をさせていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

宮本玲子 記



第5/6回技法講習会

2018・12・9 アカデミー湯島学習室
2019・1・27 ”

「呉須による濃^{だみ}技法」

講師：上田 哲也 先生
アシスタント：森 悠紀子 先生



上田先生からダミ筆3本、他筆3本、呉須が3濃度、中皿二枚、見本の下絵(椿、モクレン)が用意されていた。特別に骨描き用の面相筆が用意してあり購入する事ができた。呉須は上田先生が朝までガラス板で摺って用意して下さった特製の呉須でした。

下絵をハサミで切り抜き、カーボン紙(表裏に注意!)を貼り皿に写す。骨描き用の濃い呉須で輪郭を描く、一気に書かないと線に勢いが無くなり情けない線になってしまう。HB程度の鉛筆で骨描きにそって同じように線を書く、これがダミの防波堤になり他に越境していかない。いよいよダミ筆(中)を使用する。

先生の説明では筆を「スプーン」のように皿に水平に持っていき静かに傾け呉須を皿に筆を着けず流し込む。濃くしたい部分は時間を掛け皿に吸わせる。残りのダミは、筆に吸わせる。

モクレンの花、つばきの葉は、ダミ部分が大きく、筆にたっぷりの呉須を含ませないと途中で切れてしまう、場数が必要と感じました。



下絵をコピー紙と共に切る



コピーから転写



第7回 技法講習会

2019・2・23,24 アカデミー湯島学習室
2019・3・2

「鑄込み技法」

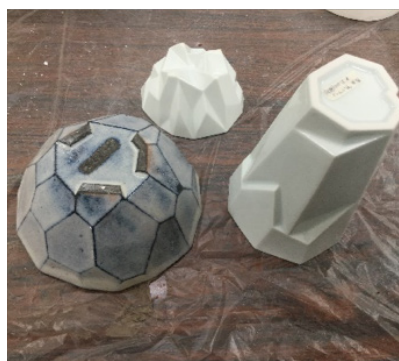
講師：茂田 真史 先生



茂田先生 抜け勾配の説明



カリ石鹸塗布 中島先生も



茂田先生の参考作品



仕上げの細かい整形

茂田真史先生の作品を拝見し魅了されたものによって、今回の技術講習会は、きめ細かいご指導もあり得難い体験となりました。

第1日目 2月23日 石膏型の原型づくり カップ・はち皿・ぐい呑から容器を選び、溶かした石膏を流し入れ硬化を待ち外します。アラカンで荒どりし面をおこし、超硬カンナで形を優先し整え抜け勾配になるよう細心の注意をし原型を作成しました。

2日目 2月24日 外枠作り・石膏の外型作り 原型(雄型)に離型剤を塗り型がはずれるよう準備します。原型から鑄込み型(雌型)を作るのに、割り型とし出来るだけ広い鑄込み口を作りました。

3日目 3月2日 いよいよ鑄込み・泥漿づくり 磁土(天草陶石)を水に溶かし攪拌、ドロドロになった泥漿を鑄込み約20分待ち、逆さにして中の泥漿を流しだします。石膏型が泥漿の水分を吸い込むことで土の厚みが石膏の内側に付き作品ができます。ところが、石膏外型の乾燥が十分でないためか、はずれない!

翌日待っての仕上げで、ぬけた!それは笑顔の広がる瞬間でした。茂田先生曰く、粘土の素材の考え方が変わる。有機的な見方が多いが、白磁の無機質の可能性、パターン化されない型の魅力がある。納得!制約がある中での完成品はなかなかの出来映えでした。有難うございました。

講習会の感想

「抜け勾配」を考えたデザインや粘土とは勝手の違う石膏の扱いに苦労しましたが、鑄込みならではの造形美と作陶プロセスの面白さを知ることができました。茂田先生には鑄込みのいろはを丁寧に教わるとともに、作品追求に対する真摯な姿勢も学ばせていただきました。四苦八苦する会員を根気よく指導していただいた中島先生にも感謝申し上げます。 阪永卓宏 記



鑄込み中



排泥作業



素焼き終了の会員作品



窯から出来上がった作品

第8回 技法講習会

2019・3・17 アカデミー湯島学習室

「銀彩技法による上絵付け」

講師：豊福 誠 教授



豊福先生の骨書き



今回は銀彩で花びらを彩色



会員も作成に懸命



上絵の具はとにかく良く摺る



赤絵具で骨描きの上に乗せる



円縁を平筆にて銀彩で彩色



竹串で銀彩部分に模様を書く



焼成した作品

初年度より恒例になりました藝大陶芸科教授豊福誠先生の上絵付け技法講習会が開催されました。

今回は先生の作品の大事なアクセントになっている銀彩技法に挑戦する事ができました。

豊福先生より、大変丁寧に上絵付け、銀彩の手法を教えてくださいました。実際に絵付け、銀彩を施している様子、竹串で文様を削り出す手法を間近で見ることができ、その技術一つひとつに大変感動しました。

実際に行ってみると非常に難しく、銀を思うように扱うことができませんでした。竹串で文様を削り出す作業は大変面白かったです。普段出来ない体験にいつの間にか夢中になり、あっという間の時間でした。

私は「上絵付け」「銀彩」ともに初めての経験で、どの工程も新鮮で大変興味深く、貴重な経験となりました。皆様方とても熱心で雰囲気の良い環境の中、一緒に学ぶことができ、素晴らしい時間を過ごさせてくださいました。豊福先生、藝大大学生の仲鉢さん、清水さんに親切丁寧に指導をして頂き、大変感謝しております。

松原宗孝 記

尾崎窯・やまぼうし研修会

2018.5.3 シンリュウ窯にて



穴窯体験に参加して

以前穴窯自体を見たこともありますし、懸命に薪をくべている映像を見たことがあります。しかし、今回の穴窯体験では、最初から野焼きの時のようにゆったりしたものではないことを思い知らされました。窯詰めの日、窯の横には大量の赤松の丸太が山積みになっており、それを大・中・小にと薪割りをしました。割っても割っても減らない丸太はそのほぼ全てを今回の穴窯に利用するとのことに驚きました。窯焚きでは窯の温度を目標の温度まで上昇させる為に温度計と睨めっこしながら薪を投入。しかし薪を投入した途端に温度が下がってしまい、窯焚きの難しさを実感させられました。



尾崎窯の方々には 服装など窯焚きに注意すべき事など丁寧に説明していただきました。私たちが見えない所で窯詰めや後片付けをやって頂いたことを本当に有り難く思います。いかに窯の温度を効率よく上げていくか、薪を入れるタイミングなどチームで工夫していくことが大切なのだということも教えて頂きました。ありがとうございました。



原始時代に行われていた野焼きから、高温焼成する為に酸化・還元が出来る穴窯が考えだされ、そこから大窯、登り窯へ。生活の変化や社会の変化により先人の苦労や工夫から生み出された先に今、があると実感する事が出来ました。

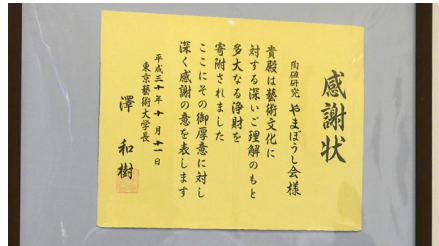
工藤久仁子 記



第2回 作品展

2018.11.15～18 於：スペースゼロ

東京藝術大学陶芸研究室支援チャリティー同時開催



寄付による藝大から感謝状

湯島小学校 作品



豊福 誠 教授



三上 亮 准教授



島田 文雄 名誉教授



高岡 太郎 先生



茂田 真史 先生



佐々木 誉斗 先生



前沢 幸恵 先生



田中 隆史 先生



樋口 拓 先生



北郷 江 先生



西村 圭生 先生



修士1年 河内 理帆

やまぼうし vol.2



修士1年 小田原 唯



研究生 蔡 遠辰



*会員 1 川村 健司



2 小松 幹夫



3 鳴島 淳子



4 廣田 弘子



5 多比羅 春代



6 茂貫 浩子



7 落合 博子



8 坂口 明美



9 長濱 善子



10 戸松 令子



11 根本 雅子



12 遠藤 成夫



13 柳井 喜美恵

やまぼうし vol.2



14 宮沢 恵美子



15 大出 ヒロ子



16 荒井 さつき



17 山中 峰雄



18 江原 英子



19 海老名 志文



20 千田 泰子



21 末田 寛治



22 近藤 健



23 鳥海 久江



24 竹村 光子



25 石川 久夫



26 河西 寿子



27 大熊 敏幸



28 赤坂 延子

やまぼうし vol.2



29 落合 卓四郎



30 合田 隆治



31 佐藤 恵子



32 石崎グロリエッタ



33 大森 一



34 工藤 久仁子



35 吉村 計



36 坂永 卓宏



田中先生の講評会



* 掲載順：発表会申込順

豊福 誠 作陶展 ギャラリートーク



豊福 誠 作陶展ギャラリートークに参加して

日本橋人形町のギャラリー「山咲木」にて12月1日から9日間、豊福 誠 作陶展が催されました。ご本人によるトークは8日と9日に行われ、2日目にやまぼうし会6名、東京藝術大学院生、留学生4名が参加しました。

程良い広さのギャラリーにバランス良く配された展示品は、ほとんどが最近の作品で、先生はその何点かを手に明るく親しみある語り口で解説して下さいました。ご自身が使用される磁土、釉薬、そして金・銀彩、さらに高価な材料を取り扱うことのご苦労や時代で変わる素材の状況について、また表、裏とも完璧な絵付けの陶板「結界」作成のヒケツまで興味深いお話を伺う事ができました。

吉村 計 記

島田文雄 作陶展 ギャラリートーク



日本橋三越本店で島田文雄藝大名誉教授のギャラリートークが2月23日行われた。

ギャラリートークは島田文雄先生の生い立ちから、現在中国で工芸デザイン科設立の為頑張っている事等楽しくお話しされました。

島田文雄先生が東京藝術大学に入って轆轤体験をし、無心になり轆轤がひけた事で陶芸コースを選んだというお話が印象に残りました。

山岸るり子 記

とようかい 「杜窯会」ってなあーに？



やまぼうし会員の方々より杜窯会についてもう少し詳しく知りたいとの声が多々あります。そこで過日、三上亮先生、茂田真史先生、平井雅子先生にインタビューさせて頂きました。

杜窯会とは東京藝術大学陶芸講座出身者と在籍者の同窓会です。発足は1965年。加藤土師萌・陶芸講座初代教授の提唱で、第1回杜窯会作陶展は日本橋三越本店にて開催。以後毎年開かれ昨年55回を迎えました。また50回展の際は、開催を記念して出展者全員の作品を掲載した冊子を出版しました。(左写真)個展と違い、多岐にわたる作風が一堂に会する展示会は他に類を見ない極めて珍しく貴重な会と言えるでしょう。



脈々と続いてきた杜窯会作陶展には時代の変遷が如実に表れ、美術、陶芸全般、近未来の牽引役も担っているとのこと。

「普段、作品制作に力を注いでいる、多くのOBの皆さんが出展されると思います。」と三上先生は期待されていました。

皆様も歴史ある杜窯会作陶展に足を運ばれては如何でしょうか？

* 2019年56回は9/4～9/10

日本橋三越本店6F アートスクエア工芸サロンにて開催

ニヨン窯名残の地を訪ねて



スイス・フランス語圏に属するレマン湖畔にたたずむ白亜の城ニヨン城。この地をこの8月に滞在先のルツェルンから訪れました。急行列車で2時間半程乗ると真夏の太陽に輝くレマン湖が見えてきます。駅から街中を抜けること15分、かわいらしいニヨン城が姿を見せます。城内の陶磁器博物館にニヨン窯で作成されたニヨン焼が数多く陳列されてます。

ニヨン窯は1781年から約200年作成され、1979年に窯が廃止後39年たつ。ル・ブルエ(矢

車菊、ルイ16世王妃が好んだ)、ニヨンローズ等可憐で愛らしいスタイルは今でも多くの人に愛されています。また動植物等のモチーフを主体的に表現した浮彫や高浮彫の作品は、眞葛焼の宮川香山が1878年のパリ万博で受賞し、海外で称賛を浴びた作品との類似性が高く、互いに影響しあったのではと思われます。



藝大卒業生による造形展
2018年 time crossing

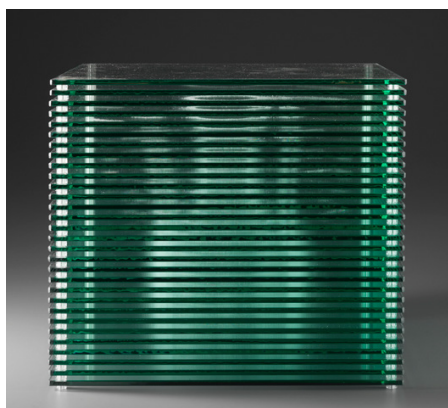
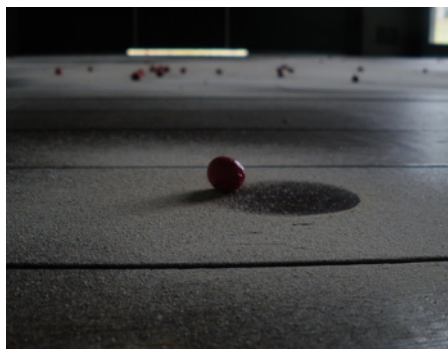
今回の作品「空」の成り立ち

今回出品している「空」の作品について説明します。2008年のある日捨てられていた陶の破片を眺めていた時でした。眺めているなかで、器物が壊れ、用途を剥奪された陶片は何ものにも属さない存在としてそこにありました。そこでその破片をいくつか取り出し形を浮き上がらせるために表面を金箔で覆ってみました。金箔で覆うことによって純粹に形のみが抽出できると考えたからです。ところが金箔で覆った陶の表面からは形以上に材質感が強く出てきました。そこで次に形を消すことによって材質感はどのように変化するかを試みました。陶の破片をハンマーで砕き粉状にしていきました。塊から粒状になり、陶の質感は変化していくものの、物質自体が変化しないことに気づきました。それは陶のプロセス、つまり土から陶に化学変化した「陶」という概念は、砕かれた状態でなおそこに存在し続けていました。

この発見から今回出品している作品「空」の構想が生まれました。初期の発表において華道家の上野裕二氏を招き、氏のパフォーマンスを保存するインスタレーションを試みました。パフォーマンスによって氏の肉体的な力が表現され、植物の赤い実が画廊空間いっぱいにならばりました。その現象をそのまま保存することを目的に、陶の粒子で包むインスタレーションを考えたのです。その他に展覧会場の周囲に陶の粒子を撒き展覧会場全体をそのまま包み込むインスタレーションなどを展開してきました。これらのインスタレーションには器の概念（赤い実を入れる器、展覧会場を器と考えるなど）を用い作品化していきました。

さらに今回の作品は、日本陶の技術の歩みである形体の模倣、つまり「写し」といわれる概念を用い中国の北宋時代の景德鎮の白磁水注の形を写しガラスの中に展開しています。モデルとなったこの白磁水注の形をガラスの層を通して錯覚によって浮かび上がらせます。形体の輪郭を取り除いていくことにより、エッセンスを抽出していき、形体の模倣を超えた抽象的な存在を作り上げることを試みています。この「空」を構成する概念に「物質の存在」、「陶のプロセス」と「歴史的時間」を骨格として、さらに陶磁器とガラス板があればどこでもつくり出せる「再現性」などコンセプトを新たに加え幅広く考えて制作しています。

32期卒業生 田中隆史



壺中居にて

新会員紹介

会員番号 2014165 鹿園みどり *メールをそのまま掲載します(入会順)

会員番号 2014169 大沼哲子 会員番号 2014170 中山美智子



会員番号 20141163 原田 裕子

以前から興味があり、芸大の講座に参加した際、この『陶磁研究やまぼうし会』にお誘いいただき、参加させていただくことになりました。参加できる機会も少ないのですが、自分のペースで頑張っって作品を作っていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。



会員番号 2014164 松原宗孝

「公開講座をきっかけにもっと色々な技術を学びたいと思ひ入会しました。

食卓に作った器が増えていくのが楽しみです。

皆様と一緒に様々な経験をさせて頂きたいと思っております。よろしくお願ひ致します。

お手数お掛けしますがよろしくお願ひいたします。



会員番号 2014167 ワテレット幸恵

陶芸は12年前にイタリアの陶芸家に楽焼の手ほどきを受けたのが初めてでした。面白くてもっと知りたくなり、オーストラリアに戻っってから本格的にクラブに入り、ロクロ、タタラ、穴窯焼成などを勉強し、そして今は磁器練り込み、呉須絵付けに惹かれています。

いつか磁器練り込みをロクロで仕上げ呉須の絵付けで飾ってみたいと、無謀な夢を見ているとあります(笑) どうぞよろしくお願ひいたします。



会員番号 2014168 桜井理宇子

陶芸の技法は多々あり、時に迷走してしまいます。この会のような充実した勉強会を開催しているところは少ないので入会させて頂き、とても嬉しく楽しみです。どうぞ宜しくお願ひいたします

もちつき大会

12月5日藝大陶芸研究室恒例の餅つき大会が行われました。会より樽酒を差し入れ、お餅と手打ち蕎麦をごちそうになりました。



自主企画

技法講習会の復習が出来たらとの声が高まり、今年度5回の活動が有りました。活動内容は復習ばかりでなく、轆轤使用、陶板作成、彫りのアドバイスを受けるなど多種多様です。

会場となったアカデミー湯島では、講習会8回、自主企画5回と活発なやまぼうし会の活動が功を奏したのでしょうか。徐々に作業室での棚を使用させてもらえるようになり、環境整備が進行中です。

社会貢献 文京区立湯島小学校



高張先生からの注意点

湯島小学校の陶芸教室支援活動に参加して

今年度は二年生から五年生と、すずかけ学級（特別支援学級）に参加しました。普段は直接子供と関わる事が無いので、とても新鮮な気持ちでエネルギーを貰いました。

作品展の時、すずかけ学級の作品に、元気のある楽しい作品ばかり、との言葉を戴き、父兄の方も喜んで見て下さいました。

親子陶芸教室も83名とお手伝い27名で盛大でした。生徒は自由に、「何も言わなくてもきれいに大胆に絵付けして勢いを感じました」と高張先生に話しました。

先生も、図工の得意でない生徒も生き生きとして驚きましたとおっしゃいました。ちょっとひびが入ったカップもありましたが、陶器にはよくあることなので次回にチャレンジしましょう。

海老名志文 記



課題 さかなの皿



図工の時間 今日は陶芸



素焼きが終わった二年生の作品



発表会 さかな皿 二年生



発表会 カレー皿 五年生



発表会 カレー皿 五年生



発表会 菊鉢 四年生



発表会 シーサー 三年生



会員も先生の注意点を聞く



やまぼうし会の発表会に出展

親子陶芸教室



指導 島田 文雄 藝大名誉教授



あふれんばかりの親子陶芸教室



個性ある作陶品

湯島小学校 PTA 親子陶芸 報告

2019年1月26日(土) 午後2時から4時 実施湯島小 参加者 80名

やまぼし会 島田 文雄 藝大名誉教授、会員 26名

7テーブルに12名の児童保護者、会員が各3名から4名が対応いたしました。

また、1月31日(金) 午後3時半から欠席者に対応しました。2組の親子4名が参加児童が1人の欠席の為、粘土を親子2名分の用意をして高張先生に渡しました。やまぼうし会3名で対応いたしました。

参加予定は80名を超えましたので 図工室の備品では 不足いたしましたので当会の備品を運び入れたり、絵筆、作陶備品を寄附いたしました。

今回 作品を作るにあたり 割れり、壊れたりするリスクを十分に説明できていたのでしょうか。乾燥で底割れがいくつかあり、補填材で補修も出来る限りさせていただきました。補修をいたしました。難しい作品もありましたことをご理解いただきたく願います。

図工室の窯の不具合もあり お約束の日程の受け渡しが危ぶまれましたが何とか出来ました事に安堵しております。 根本 雅子 報告記

このたびはとても詳細に報告書を作成いただき有難うございました。

拝見しますと、日程も人手も大変なご苦勞様があったものと改めて感謝申し上げます。

島田先生のお話も貴重なもので、私も勉強になりました。

来年度も本校の児童の授業にお力添えを賜りたく、お願い申し上げます。

文京区立湯島小学校 校長 原 香織



取っ手が上手に付けてます



ランプシェード



花が咲いています



新宿で大人の道草を。

柿屋ギャラリー
KAKIDEN GALLERY

<http://www.kakiden.com/gallery>

陶芸用品・陶芸窯の専門店

- ・陶芸粘土、釉薬、小道具、原料
- ・陶芸焼成炉（電気窯・ガス窯・灯油窯）
- ・材料から焼成炉まで幅広くご用意しております。

カタログのお送りや
店舗販売も行っております
お近くのシンリュウ営業所へ
お気軽にお問合せ下さい



陶芸窯・陶芸材料メーカー

シンリュウ株式会社

■ 埼玉本社・工場	埼玉県朝霞市上内間木 5 1 4 - 2	TEL:048-456-2123 FAX:048-456-2900
■ 神奈川支店	神奈川県厚木市金田 6 7 2 - 5	TEL:046-295-1641 FAX:046-295-1624
■ 北関東支店	茨城県笠間市笠間 2 4 8 7 - 3	TEL:0296-72-9950 FAX:0296-72-9952
■ 東北支店	宮城県仙台市若林区六丁の目南町8-82	TEL:022-288-2651 FAX:022-288-2652
■ 信楽支店	滋賀県甲賀市信楽町柞原 5 0 0	TEL:0748-82-4166 FAX:0748-82-4169



丸谷絵具・陶芸材料・上絵付筆

千園堂



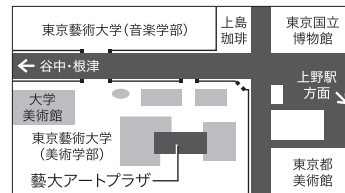
〒923-1112
石川県能美市佐野町イ1-5番地
TEL 0761-58-5711
FAX 0761-58-5677

geidai
art
plaza

藝大アートプラザ

東京藝術大学 × 小学館
藝大アートプラザ共同運営事業
～藝大出島プロジェクト～

2018年10月、東京・上野にある東京藝術大学のキャンパスに「藝大アートプラザ」が誕生しました。藝大の学生、先生、卒業生の作品が展示され、購入できる場所です。学内での研鑽の成果を、社会に、世界に届ける賑わいの「出島」です。



artplaza.geidai.ac.jp

〒110-8714
東京都台東区上野公園12-8
TEL050-5525-2102

営業時間 10:00～18:00
休業日 月曜日(祝日の場合は営業し翌平日休業)、展示替え日ほか

お役に立ちます。 お手伝いします。

アマチュアから専門家まで
陶芸用品と機器のことなら何でも、
お気軽にお申し付け下さい。

40年の経験と信用を誇る
陶芸機械・材料専門店

日本電産シンボ(株) 社友代理店

彩里陶材

〒362-0021 埼玉県上尾市原市北1-1-14
TEL 048(722)2390 FAX 048(722)2398
実験工房 埼玉県上尾市原市179-1
HP <http://www.tougeisairi.com>
E-mail sairi@extra.ocn.ne.jp

編集後記

創刊第2号。今回は20ページから24ページへ、部数も200部から300部への増刷となりました。今年度は技法講習会が8回と前年より2回増え、作品展掲載が2ページより4ページへと2ページ増がページ割の内訳です。出稿の締め切り近くに、編集スタッフの一人が体調を崩されるというハプニングがありましたが幸い回復され、皆様のお手元に届けられるようになりました。

今後ともやまぼうし会の活動をご支援戴けましたら幸いです。

編集委員(アイウエオ順)

赤坂延子・内田和子・大熊敏幸・落合博子・加藤史郎・高野静絵・竹村光子・鳴島淳子・宮沢恵美子・茂貫浩子 編集長

発行年月日 2019年4月 発行責任者: 落合卓四郎

揮毫: 島田文雄 名誉教授

表紙作品: 豊福 誠教授 裏表紙作品: 三上 亮准教授

